

# スペイン語における使役動詞と格形式

高橋節子

## 1. 序

スペイン語の使役動詞 *hacer*・*dejar* に支配される格形式<sup>1)</sup> が動揺していることは、従来から指摘されてきた。例えば, Cuervo, 1977: § 121, Ramsey, 1956: § 19.36, 等。

筆者も渡辺1982a, 1982bなどでこうした現象に触れたが、今までは筆者の関心が専ら感情動詞における格形式の動揺におかれていたため、使役動詞の揺れについては整理する機会を持たなかった。この小論では、使役動詞の格形式の揺れに焦点を当て、それが今までに明らかになった感情動詞の揺れとどのような相違点、類似点があるのかを探っていきたい。

この小論で用いた資料は次の通りである。カッコ内は省略記号を示す。

C. Laforet (L) : La isla y los demonios (ID) / La llamada (LL) / Nada / La mujer nueva (MN).

L. Romero (R) : La corriente / Los otros / La Noria.

D. Medio (M) : La pez sigue flotando (P) / Bibiana / Otra circunstancia / Un funcionario público (F) / Nosotros, los Rivero (R)

R. Sender (S) : El bandido adolescente / La antesala (A) / Relatos fronterizos (RF) / Epitalamio del prieto Trinidad (E) / Las tres hermanas / Novelas ejemplares de Cíbola (NE)

M. Puig : Pubis angelical / El beso de la mujer araña / Maldición eterna a quien lea estas páginas.

S. Skydsgaard : La combinatoria del infinitivo español.(SK)

スペインの話者は、人間の男性に対して、直接・間接の文法関係を問わず与格を選択することが多い。この中では Laforet, Romero, Medio の三人がそうである。従ってここでは、原則として文法関係と格関係が一致している女性形を考察の対象にする。

## 2. 不定詞の目的語と格形式

使役動詞が選択する格形式は、不定詞が目的語を従えるか否かに影響される事はしばしば指摘されてきた。つまり、不定詞が目的語を従える時には与格を、目的語がないときには対格をより好む。この傾向を端的に示す例を一つ挙げておこう。

(1) María la había hecho elegantizarse. Le hizo hacerse una colección de trajes de verano. (L-MN-94) マリーアは彼女をエレガントにさせようとした。夏服を一揃い揃えさせようとした。

ともに同一人物を指しているにもかかわらず、異なる格 (la・le) を選択している。両者の異なる点は、前者の不定詞が目的語を取らないのに対して、後者は取っている点に求められる<sup>2)</sup>

目的語の存在と格形式のあいだにはなぜ相関関係が見られるのだろうか。次の例を見てみよう。

(2) Las listas de verbos irreglares se las hacen aprender de memoria a los alumnos (SK-277) 不規則動詞の表を生徒に暗記させる。

hacer に前置して二つの代名詞が並置されている。se は los alumnos を指示し、las は las listas を指示している。los alumnos は hacer の目的語、las

listas de verbos は aprender の目的語と、本来は別々の動詞の目的語であるが、それが二つ並置されることで、人間を示す代名詞は与格とならざるをえない。スペイン語では二つの対格が並置されることはありえないからである。dejar にも全く同じことが言える。

(3) Ese programa no se lo dejamos ver a los niños (SK-271) この番組は子供にはみせられない。

つまり不定詞が目的語をもつと、本来は補文の述語の直接目的語<sup>3)</sup>であるにもかかわらず、使役動詞に前置されることで、あたかも使役動詞の間接目的語のような様相を呈してくる。これが補文の目的語の有無と格形式選択の要因であろうことは容易に想像がつく<sup>4)</sup>。

また Comrie, 1976のように、使役動詞における補文の目的語の有無と格形式の関係をユニバーサルな現象として捉えた論文もある。それによると、補文の主語は、補文に直接目的語がなければ主動詞の直接目的語(対格)になり、補文に直接目的語があれば文の間接目的語(与格)となり、補文に直接目的語と間接目的語の両方があればそれ以外の斜格になる、というものである。

福寫, 1985はこの Comrie の理論をスペイン語の使役動詞と知覚動詞に当てはめて考察したものである。その結果、次のように結論づけている。

「イスパニア語の使役文、知覚文における従属動詞のとり必須項の数は、被使役者、被知覚者が直接目的語(対格)になる傾向に反比例し、間接目的語(与格)になる傾向に正比例する。

hacer 使役文> dejar 使役文> 知覚文という序列は、被使役者、被知覚者が直接目的語(対格)になる傾向に反比例し、間接目的語(与格)になる傾向に正比例する。」(p.74) カッコ内は筆者。

この結論には全面的に賛成である。渡辺, 1982a, 1982bにおいても同様な

傾向を示唆しておいた。ここで問題になるのは、同じ構造を持つ *hacer*, *dejar* 使役文及び知覚文が、なぜ格選択の上で差があるかということである。福寫も最後に同じ疑問を投げかけている。そこには、補文の目的語の有無という文法的条件のみでは決定できない他の条件が隠されているのではないだろうか。この小論ではこの疑問に答えることを主な目的とする。

### 3. 操作使役と指示使役

使役状況には二種類あると考えられる。一つは直接手を下して何かをさせる場合であり、もう一つは、口頭で、あるいはその他の間接的な方法でなにかをさせる場合である。前者の使役状況を操作使役、後者の使役状況を指示使役と呼んでおくことにしよう。この呼び方は柴谷に倣ったものである。

使役の大部分は指示使役によって占められていて、実際の使役文の中で操作使役が使われる割合は極めて小さい。しかし操作使役は格選択の上で非常に興味深い傾向を示す。

スペイン語の二つの使役動詞 *hacer* と *dejar* の中で、操作使役と指示使役の区別があるのは *hacer* 使役だけであるので、以下、*hacer* 使役文についてのみ見ていくことにする。

Laforet は、*hacer* 使役において補文が目的語を持つ場合に、かなりの高率で与格を選択する作家である。目的語を有する27例のうち25例までが与格形を選択している。目的語を持ちながら対格を選択している非常に例外的なケースは次の二つである。

(4) Jose Camino, un hombre alto, flaco y rubio, cogió del brazo a su hermana y la apartó de aquel borde del agua . . . La hizo retroceder unos pasos <sup>5)</sup> (L-ID-12) ホセ・カミノは、背が高く痩せてブロードの髪をした男だが、妹の腕を掴むと、水際から引き離れた。 . . . 彼女を数歩後退させた。

(5) La hizo subir las escaleras a empellones, (L-ID-179) 彼女をこずきながら階段を登らせた。

いずれの場合も、主語の人間が直接手を下して被使役者にある行為をさせている操作使役の例である。

その他の操作使役の例はすべて自動詞であるが、やはり対格を選択している。ただし、これらの例は明らかに操作使役と断定できるもののみを取りあげた。実際には操作か指示かの区別が難しい場合も多く、そのケースは含めていない。

(6) Se acercó y la cogió por los hombros haciéndola sentar sobre el cajón<sup>6)</sup>. (L-ID-35) (ピーノは) 近付いて肩を掴むと、彼女を箱の上に坐らせた。

(7) Pablo la cogió del brazo para hacerla andar de nuevo hacia la carretera (L-ID-205) パブロは彼女の腕を取ると道路の方に再び歩かせた。

(8) Había que conducirla al sillón y, una vez allí, solía pasar horas sin moverse, hasta que alguien venía para hacerla andar por la habitación un rato, (L-ID-83) 彼女をイスに連れていかなければならなかった。一旦そこに坐ると、誰かが来て部屋の中を歩かせるまでは、何時間でも動かないのだった。

Laforet 以外の作家でも操作使役にはやはり対格を用いている<sup>7)-8)</sup>。

(9) Ger tomó a la niña en sus brazos, haciéndola dar en el aire dos volteretas. (M-R-35) ジェールは子供を抱くと二度グルグルと回した。

(10) Ger la hizo dar dos vueltas en el aire. (M-R-289) ジェールは彼女を二度回した。

(11) La cogía por debajo de los brazos y la hacía dar dos vueltas en el aire. (M-F-104) 彼は脇の下に手を差し入れて抱き上げると、二度グルグルと彼女を回した。

(12) . . toma a la criada entre sus brazos y , sin permitirle soltar la escoba, la hace dar dos vueltas por la habitación. (M-P-95) 彼は女中を腕に抱くと、帚木を下に置く隙も与えず、部屋の中を二度廻した。

(13) Paco la frotó el hocico contra los zapatos del muerto y la hizo arrodillarse. La vieja se estremecía bajo la mano de Paco que le atenazaba el hombro. (S-NE-263) パコは死人の靴に彼女の顔をこすりつけ、膝まづかせた。老婆は肩を押え付けているパコの手の下で震えていた。

(14) . . la hizo dar una vuelta (S-E-82) 彼女を一回転させた。

この中で(9)(10)(11)(12)(14)が dar dos vueltas, dar una vuelta と目的語を伴っているにもかかわらず、対格形を選んでいることに注目されたい。同じ dar vuelta を用いても、操作使役でなければ与格形を選択することもある。

(15) Paulina entonces vio en la cara de su padre algo jadeante, bestial, algo que le hizo darse media vuelta y correr. (L-MN-55) パウリーナはその時、父親の顔になにかあえぐような、獣的なものを感じた。それはクルッと背中をむけて駆け出さずにはいられないようなものだった。

ところで、操作使役はなぜ対格を取り易いのだろうか。

使役動詞には二種類あると考えられる。一つは語彙的な使役 (lexical causatives) であり、もう一つは生産的な使役 (productive causatives) である。

(柴谷, 1976 : 3)

語彙的な使役とは、使役的な状況<sup>9)</sup>を充たすような語、たとえば abrir (開ける), matar (殺す), levantar (起こす, 立てる)などを指す。また生産的な使役とは形態的に定まっている、スペイン語なら hacer・dejar, 英語なら make・have・cause・let といった語彙が、日本語なら se / sase といった形態素がそれに当る。

語彙的な使役は、他動詞文として専ら操作使役状況を表すのに用いられ、

生産的な使役は、通常指示使役的な状況を表すのに用いられる。柴谷, 1984 : 277は次のように説明している。

「使役状況が一つの事象として捉えられ、他動詞文で表される典型的なものは、使役者が被使役者に直接作用を与える、いわゆる操作使役である。例えば、『子供に服を着せる』 put the clothes on the child は、使役者が直接服を手に持って子供に着せることである。」「一方、二つの事象として捉えられる使役状況の典型的なものは、使役者が被使役者に口頭で指示をして物事をさせる指示使役である。使役文『子供に服を着させる』 make the child put on the clothes は、普通子供に服を着るように指示を与え、子供がそれに従って服を着たという状況を表す。」

スペイン語でも同様のことが言える。

(16) La levanté de la silla.

(17) La hice levantar de la silla.

(18) La hice levantarse de la silla.

(16)は他動詞の使役の例であり、(17)(18)は hacer を用いた使役の例である。使役者は(16)では直接手を下して立たせたのであり、(17)(18)では間接的に命令、その他で被使役者が自分で立つように仕向けたものである。(ただし、(17)には別の読みもある。) (出口, 1984 : 312-313)

つまり、hacer を用いた操作使役というのは、意味的な観点からは他動詞に非常に似ていることが分かる。両者とも主語の人間が目的語に対して直接働きかけて何かを為さしめるものだからである。従って、格形式も通常他動詞同様対格が選択されるのである。こうした意味と格の関係については、次章で少し詳しく述べたいと思う。

#### 4. 主語の有生無生

使役動詞の格選択には、補文の目的語の有無と、操作・指示使役という二

つの要因が関係していることが分かった。しかしこれだけでは、なぜ hacer と dejar では選択する格形式に対する好み異なるのかは説明できない。なにか他の要因があるのではないだろうか。

筆者はすでに、感情動詞が選択する格形式も揺れていることを示した。(渡辺, 1982a, 1982b, 高橋, 1985)。ここでいう感情動詞とは alegrar (喜ばせる), interesar (興味をもたせる), molestar (苛々させる), sorprender (驚かせる) といったすべて語彙的な使役動詞ばかりである。使役動詞と感情動詞は“使役状況を表す”という共通点を持っている訳である。それでは、感情動詞の揺れの原因と使役動詞の揺れの原因にもなにか共通点があるのではないだろうか。そこでまず感情動詞の揺れの原因について、簡単にまとめてみることにする<sup>10)</sup>。

感情動詞は主語が事物の時、格形式の動揺が起り易くなる。次の例を見ていただきたい。(19)は主語が人間であるから対格を選択している。一方,(20)と(21)は主語が事物である。同じ動詞を共有しているにもかかわらず,(20)は与格,(21)は対格を選択して、格の動揺が見られる。この原因は感情動詞の意味構造にあると考えられる。

(19) La amiga de Mercedes procuraba calmarla. (L-LL-55) メルセデスの友人は彼女を慰めようとした。

(20) Pero no le alegró nada esta charla. (L-LL-241) しかしこのおしゃべりは何の気晴らしにもならなかった。

(21) Sólo el aguardiente, dulce o seco, la alegra y la rejuvenece. (R-C-91) 甘口でも辛口でも、とにかく焼酎だけが彼女を陽気にし、若返らせてくれるのだ。

感情を体験する主体は意味論的には「経験者」と解されるから、三例とも代名詞 la・le で表された人間は同じ「経験者」である。しかし主語の担う意味機能は、人間の主語を持つ(19)と事物主語を持つ(20)(21)とは異なって



いる。(19)の主語は人間であり意図的に対象に働きかけたと解釈できるので、意味機能としては「動作主」と考えられる。一方、(20)(21)の方は主語が事物であり、意図的に対象に対して力を及ぼすことはできないから「動作主」ではない。しかし、対象にある心理状態の変化を起こさせる使役的作用をなすところから、「原因」と考えられる。

ところが、こうした個々の意味機能は格の選択に直接影響を及ぼす訳ではなく、むしろ、主語と目的語間の相対的な意味機能の能動性の差が問題となってくる。そこで、能動性の大小をはっきりさせるために、意味機能を〈animate〉、〈cause〉という二つの意味素性によって構成しなおしてみよう。

動作主：〈+animate〉〈+cause〉

経験者：〈+animate〉〈-cause〉

原因：〈-animate〉〈+cause〉

スペイン語の二項動詞の場合に、その他動詞、自動詞を決定する意味的要因は、主語と目的語間の意味的な能動性の大小であると考えられる。例えば、通常の典型的な他動詞においては、主語の意味機能(動作主〈+animate〉〈+cause〉)が最大の能動性を持ち、目的語の意味機能(対象〈-animate〉〈-cause〉)の能動性は最小であるから、他動詞として最も安定し、格形式も常に対格を取り揺れることはない。またその逆に、目的語の能動性の方が主語の能動性よりも高い場合がある。gustar, agradar に代表されるもので、Me gusta la música. (私は音楽が好きだ)という文においては、目的語の能動性(経験者〈+animate〉〈-cause〉)の方が主語の能動性(対象〈-animate〉〈-cause〉)よりも高いために、二項述語でありながらもはや他動詞としては機能することができず、文法的には自動詞、従って格は与格を取ることになる。

(19)(20)(21)の三つの感情動詞についていえば、(19)は主語が動作主(〈+animate〉〈+cause〉)、目的語が経験者(〈+animate〉〈-cause〉)であるから、主語の意味機能の方が大きいために他動詞としての条件を満たし、対格を選択している。一方、(20)(21)のように主語が事物の場合は、主

語が原因(〈- animate〉 〈+ cause〉), 目的語が経験者(〈+ animate〉 〈- cause〉)と解されるため, 両者間の能動性の大小が簡単には決定できない。〈animate〉の観点からすれば目的語の方が能動性が高いが, 〈cause〉の観点からすれば主語の方がより能動的である。このように無生主語を持つ感情動詞は他動詞としては非常に不安定な意味構造を持つといわねばならない。格形式が与格と対格との間で揺れているのもここに原因があると思われる。

感情動詞の揺れの原因についていろいろと述べてきたが, これは使役動詞の揺れと関連があると思われるからである。感情動詞も使役動詞もどちらも使役状況を示す点では一致している。また感情動詞の大きな特徴としては, 目的語が常に人間であるのに対して, 主語がしばしば無生物になるという, 通常他動詞とは正に逆の選択をしていることが挙げられる。

一方使役動詞の方は, 主語の有生無生に関して, hacer と dejar の間に著しい違いがみられる。つまり, hacer では無生物主語に対する拒否反応は全くないばかりか, むしろ無生主語をより好む傾向すら見られるのに対し, dejar の方は, 特殊な環境(註11参照)でなければ通常主語は人間になる。この有生・無生主語に対する好みの違いが, なぜdejarよりもhacerの方が与格を取り易いのか, 言い替えれば, なぜhacerの方が格が揺れやすいのか, といった疑問に対する一つの解答になるであろう。

それでは具体的に, hacerの場合に主語の有生無生と格の間にはどんな関係があるのかを見ていくことにしよう。dejarの場合はそもそも無生物が主語になるケースは非常に少なく, 主語の有生無生と格の関係を考えることはあまり意味がないと思われるので割愛することにする。

まず, 次の表を見ていただきたい。これは, Laforet・Medio・Romero・Senderの四人の作家について, 格形式と主語の有生無生の関係を調べたものである<sup>11)</sup>。

	<u>LAFORET</u>		<u>MEDIO</u>		<u>ROMERO</u>		<u>SENDER</u>	
	有生	無生	有生	無生	有生	無生	有生	無生
LA : LE	18:6	29:37	9:0	18:6	8:2	3:5	13:7	5:5

これを見て分かるように、hacer の場合には無生主語と与格、有生主語と対格の結び付きの方が、その逆の場合よりも相対的に好まれる傾向がある。Laforet と Romero の場合は、有生であれば対格の方が優勢であり、無生であれば与格の方が優勢になる。Medio と Sender に関しては、有生の時にはやはり対格の方が多いが、無生の時でも対格の方が多いか、又は対格与格ともに同数である。しかし対格と与格の割合を考えると、無生主語の時の方が有生の場合に比べて、与格を取る比率がより高くなっていることが分かる。しかしこうした相関関係は、先に述べた目的語の有無と格形式間の相関関係に比べると、さほど強力なものであるとは言えないようである。

有生主語は意味的には「動作主」（あるいは使役者）と考えられる。無生主語は意図的に使役行為を被使役者に及ぼす事はできないので、「原因」と考えられる。また、被使役者の意味機能は、主語の有生無生にかかわらず同一だと考えられるので、主語と目的語間の意味機能の能動性の差は、主語が有生の時により大きく、主語が無生の時は非常に小さなものとなる。こうした主語と目的語間の意味機能の能動性の差は、先に詳しく述べた感情動詞の場合と非常に良く似ている。hacer の格形式が動揺している原因の一つであろう。

また dejar の場合は、hacer に比べて有生主語との結び付きが遙かに強い。Laforet, Medio, Romero, Sender の例でいえば、hacer の171例のうち有生が63、無生が108と無生主語の割合が高い。一方 dejar の方は全44例のうち、無生主語は僅か4例しかない<sup>12)</sup>。この傾向は被使役者が三人称以外の場合にも、また Skydsgaard の例でも確かめられる。これは dejar がもともと「ある行為を妨げる事ができるのにもかかわらず、それをしないで行為を許容する」という意味なので、主語は当然行為を妨げることができる有生者でなければ

ならないからである。

有生（動作主）主語と対格，無生（原因）主語と与格という関係がスペイン語の使役文（感情動詞のような語彙的使役と *hacer*・*dejar* の生産的使役を含む）のなかで認められるとしたら，有生主語との結び付きが極めて強い *dejar* が *hacer* に比べて対格を選択し易い理由の一つもここに求められるようである。

## 5. 使役動詞と語順

感情動詞，使役動詞の格が揺れる現象には，単に文法的な要因のみならず，そこには意味的な要因も絡んでいることを述べた。ところがこうした格，統語，意味レベルの相互関係は，さらに談話機能的側面にも影響を及ぼす。例えば，典型的な他動詞が「主語＋動詞＋目的語」という語順を好み，通常は主語が談話上の主題となるのに反し，感情動詞では，「目的語＋動詞＋主語」という語順になることが多く，目的語が文の主題となる。使役動詞における格形式と語順との関係はどのようなになっているのだろうか。

宮本，1975，1977によると，*hacer* と知覚動詞の間には「語順の類型的相違」が見られるという。

(22) a. \* *Vimos rechazarlos al enemigo.*

b. *Vimos al enemigo rechazarlos.*

(23) a. *Hice salir a Juan.*

b. °\* *Hice a Juan salir.*

「*ver* は弱形人称代名詞の目的語をもつ不定詞の主語である名詞が不定詞より後に置かれると“文法性”が著しく低下するのに反し，*hacer* では前置されると低下する。」（宮本，1975：102）

これに対して *dejar* は，*ver* と同じ語順にしても *hacer* よりも容認度が高い。

(24) a. Deje salir a Juan.

b. ° Deje a Juan salir. (宮本, 1975 : 108)

Saltarelli, 1976 : 95も同様の見解を述べている。

(25) a. María hace escribir a Juan.

b. \* María hace a Juan escribir.

(26) a. María dej a Juan escribir.

b. María dej a Juan escribir.

Bordelois, 1974 : 90も dejar では二つの可能性があるのに対し, hacer では一つの可能性しかないとして, 次の例を挙げている。

(27) a. Deje a Juan comprar cigarrillos.

b. Deje comprar cigarrillos a Juan.

(28) a. Hice comprar cigarrillos a Juan.

b. \* Hice a Juan comprar cigarrillos.

宮本1977 : 512ではこの「語順の類型的相違」と Clitic Climbing の関係を次のように説明している。

「この事実は ( hacer では Clitic Climbing が比較的容認されるのに対し, ver では不可であること), 定形動詞と不定詞の『結合度』という概念を仮定すればよく説明される。即ち, hacer → mandar → ver と進むに従ってその『結合度』が低下し, Clitic Climbing の可能性が減少する半面, 実名詞の中間部への挿入が容易になる。」カッコ内は筆者。

宮本のいう定形動詞と不定詞の『結合度』と格形式の間にはどのような関係があるのだろうか。hacer, dejar, ver を比べてみると, ver → dejar → hacer の順に補文の主語が動詞から離れ, 動詞と不定詞の結合度が低下している。そうしてこの同じ順序で与格が出現する割合が増えてくる。このことは, 一つの文中に二つの名詞句があれば直接目的語の方が間接目的語に先行する, 言い換えれば直接目的語の方が間接目的語よりも動詞との結合度が強いことと無関係ではあるまい。補文の主語が不定詞に後置する語順を好む hacer では, 補文の主語が直接目的語と解釈される可能性が dejar や ver に比べて減

少するため、格形式も与格の方が好まれることになると考えられる。

hacer, dejar, ver の三つの動詞を比べた場合に、hacer よりも dejar の方が、さらには ver の方が対格を取り易いという事実は、こうした語順のレベルとも関わっている<sup>13)</sup>。

## 6. 結 論

この小論では、使役動詞 hacer と dejar の格形式がなぜ揺れるのか、またその揺れ方が hacer と dejar とで異なるのはなぜか、という問題を扱ってきた。使役動詞の揺れに関しては、まず補文の目的語の有無という文法レベルでの要因が大きく関わっている。また意味レベルにおいては、主語の有生無生の問題、操作使役か指示使役かという特徴も関与している。語順については相関関係を指摘するのは他の場合に比べると困難であるが、目的語と不定詞の何れが動詞の直後に来るかという傾向と格形式の間には、一応の関係がありそうである。

感情動詞の揺れを探った時に述べたように、こうした格と文法レベルの不一致の現象は、単に形態と統語のレベルに留まる限り説明できないことが多い。意味のレベル、談話機能のレベルまで含めた広範囲な考察が必要である。

### 〈註〉

1) 感情動詞、使役動詞といった格が揺れている現象を扱う時には、文法概念と形態上の概念を混同しないようにすることが肝要である。対格を直接目的語と、与格を間接目的語と同一視することは非常に危険なことである。こうした論法でいくと、与格を好む pegar や interesar などを自動詞に分類するような誤りを犯しかねない。この小論ではこうした統語、形態の二つのレベルを区別するために、直接目的語・間接目的語という用語を統語レベルに、対格・与格を形態レベルでのみ用いることにする。

2) 同様の関係が知覚動詞が不定詞を従えた場合にも見られる。

(i) Estaba casi segura cuando lo vio entrar y sobre todo cuando le vio sacar la mano del bolsillo enpuñando un arma. (S-RF-26) 彼が入って来るのを見た時、とりわけ、武器を握り締めた手をポケットから出すのを見た時、彼女はほとんど確信した。

その他筆者が見つけた例としては次のようなものがある。

(ii) Siempre le había oído alabar la de Eulogio. (L-MN-58) 彼はいつも彼女がエウロヒオの有能さを褒めるのを聞いてきた。

(iii) Antonio le vio empujar la puerta de un café. (L-MN-235) アントニオは彼女がある喫茶店のドアを押すのを見た。

ただし、知覚動詞の場合の揺れは使役の場合ほど顕著なものではなく、作家によってはまったく揺れないこともある。またその揺れ方もかなり散発的で首尾一貫してないようである。従って知覚動詞については付随的に述べるに止めたいと思う。

3) 使役動詞の目的語は直接目的語と考えられる。その理由は当該名詞句を主語にした受身相当表現が可能な点に求められる。

(i) Un vigilante nocturno, don Manuel Fernández, de cincuenta y ocho años de edad, fue atropellado y muerto, o más bien dejado morir, en la calle de Bravo Murillo. (SK-1183) 夜警のドン・マヌエル・フェルナンデス、58歳は、ブラーボ・ムリーヨ通りで車に引かれて死んだ、というより死ぬままに放っておかれた。

(ii) Con este texto, hecho llegar a los corresponsales extranjeros en Buenos Aires, entre ellos el de Cambio 16... (SK-1184) プエノスアイレスの海外駐在員、そのなかにはカンピオ 16 の記者も含まれているが、に届けられたこの資料で...

(i), (ii) の文に対応する能動文はそれぞれ (iii), (iv) である。

(iii) dejaron morir a un vigilante nocturno...

(iv) hicieron llegar este texto a los corresponsales extranjeros...

hacer に関しては、主語の名詞句が事物であり、また ser が表面に現われていないので完全な受身の形式ではないが、受身を嫌うスペイン語にあっては、不完全ながらも一応名詞句が直接目的語であるという根拠にはなるであろう。また人間が hacer の目的語になっている場合には、受身は不可能なようである。

例えば、Mourelle, 1981 : 20 は次のような例を挙げて、使役動詞 hacer の受身は不可であると述べている。

(v) Juan hace beber el café a Antonio.

→\* Antonio es hecho beber el café por Juan.

また知覚動詞+不定詞の構文でも受身が可能なようである。

(vi) La señora vio llegar a la asistenta. → La asistenta fue vista por la señora. (Demonte, 1977 : 189)

(vii) La Tebaldi fue oída cantar esta aria. (Demonte, 1977 : 195)

従って、知覚動詞＋不定詞の場合でも目的語は直接目的語と考えられる。

4) 同じことが知覚動詞にも当てはまる。

(i) Me divierte mucho vertelo hacer おまえがそれをするのを見て私はとても嬉しい。

te は ver の直接目的語、lo は hacer の直接目的語であるが、両者が並置されると te は間接目的語のような様相を呈してくる。

5) (4)は retroceder を自動詞、unos pasos を副詞的修飾語と考えれば補文を持つケースには当てはまらないことになる。

6) 使役動詞の補文の述語は再帰代名詞を省くことができるから、これは Se acercó y la cogió por los hombros haciéndola sentarse sobre el cajón とほぼ同義になり、自動詞の例に入る。

7) Laforet は男性の人間が hacer の目的語になった場合には、補文の目的語の有無にかかわらず、ほとんど総て与格を選択している。対格を取るのは非常に稀なケースで僅か三例しかなかったが、その中の一つが操作使役である。

(i) . . . salió despedido un hombre borracho , con tan mala suerte, que cayó sobre Juan, haciéndolo vacilar (L-ID-300) 酔っぱらった男が別れを告げて出てきた。と、運悪くファンに倒れかかって、彼をよろめかせた。

8) ただし例外もある。以下の例は操作使役でありながら与格を選択している唯一の例である。

(i) Cuando iba a marcharse le tomé la barbita, le hice levantar el rostro y la besé en los labios. (S-RF-288) (彼女が)立ち去ろうとした時、私は顎に手をかけ、顔を上げさせると唇に接吻した。

9) ここでいう使役的狀況とは次の条件を充たすものであると規定される。

(i) 事象<sup>2</sup>がもう一つの事象、つまり事象<sup>1</sup>が起こった時よりも後に起こっている。

(ii) 事象<sup>1</sup>と事象<sup>2</sup>の関係は、事象<sup>2</sup>の生起が事象<sup>1</sup>に完全に依存していて、他の全ての条件が同一である場合に、もし事象<sup>1</sup>が起こっていなければ事象<sup>2</sup>も起こっていないであろうという反事實的推論が下せる状態である。(柴谷, 1984 : 273)

10)この点については高橋, 1985を参照。

11)この数字は渡辺, 1982 : 209に挙げたものと若干異なっている。これは代名詞が補文の主語にならない例を除いたためである。

(i) Por un momento fue un miedo tan grande que le hizo temblar las rodillas con violencia. (L-ID-171) その時の恐怖が余りに大きかったので、彼女の膝はブルブル震えた。

(ii) Marta sintió su dolor agudo, irracional, que le hizo asomar lágrimas a los ojos. (L-ID-295) マルタは鋭い、訳の分らない傷みを感じて、目に涙を浮かべた。

これらの例においては、hacer の目的語が補文の主語ではなく、所有を示す間接目



の語となっている。補文の主語はそれぞれ *rodillas*, *lagrimas* である。(i), (ii)の後半は次のように書き換えることができる。

(iii) . . . *que hizo temblarle las rodillas* . . .

(iv) . . . *que hizo asomarle lágrimas a los ojos* . . .

従ってこれら補文の間接目的語になる例は、今まで扱ってきた例文とは異なり、使役動詞に目的語がない例ということになる。ただ外見上は *hacer* の前に与格が来ているから、あたかも *hacer* の目的語のような観を呈することになる。こうした例文は、今まで扱ってきた補文の主語が使役動詞の目的語になるような例文とは区別されるべきものである。

福罵, 1986 : 68-69にも同じような例がデーターに含まれているが、これも不適合と思われる。

(v) . . . *fijese que la envidia le hacía temblar el pómulo izquierdo y el párpado derecho*.

あの女は妬ましさのあまり、左頬と右まぶたが震えていましたっけ。

(vi) *El le hace preparar la habitación de huéspedes por un mayordomo que la mirara*. 彼は、変な顔をして彼女を見ている執事に命じて、客間でもてなす仕度をさせたわ。

(v)は所有の与格、(vi)は利害の与格の例で、どちらの与格も補文の主語として機能している訳ではない。

12) *dejar* のなかにも無生主語を取る場合がある。44例中4例のみであったが、これらが全て否定で使われている点は注意を要する。

(i) *El temblo llegó a ser tan grande que no la dejaba pensar*. (L-ID-176) 彼女はあまり怯えたので考えることができなかった。

(ii) . . . *hay otra espina que no la deja ser feliz a Berta la buena* (R-N-192) 善良なベルタが幸せになれないもう一つの障害があった。

(iii) *Esa otra espina, de la que casi ni quiere acordarse, pero que muchas mañanas, fatigada y todo, no la deja dormir, es su madre*. (R-N-192) もう思い出したくもない、けれどすっかり疲れきっている朝も眠りにつかせてくれないこの障害とは、彼女の母親であった。

(iv) *Marta Ribé sabe bien que este deseo no la dejara nunca vivir en paz*. (M-P-185)

マルタ・リベはこの望みのために平穏な暮らしができないであろうと分っていた。

一方 *hacer* 使役は否定で使われることが極端に少ない。Laforet, Romero, Medio, Sender の四人の作家のなかで、使われていたのは僅かに一例に過ぎない。

(v) *Si lo fusilan ustedes, prométanme que no lo martirizarán, que no le harán sufrir*. (S-E-150) 彼を銃殺するんだったら、どうぞ痛めつけないで、どうぞ苦しめないでください。

つまり、*hacer* と *dejar* の間には事物主語、否定という特徴においては互いに相補

的な関係にあるということができよう。

13)使役動詞，知覚動詞が実際のテキストに現われる語順は，不定詞や補文の主語の長さ，不定詞が目的語を取るか否かも絡んできて，一筋縄ではいかない問題のようである。

### 〈資料体〉

- Laforet, Carmen (1970) *La isla y los demonios*, Barcelona, Destino.  
(1970) *La llamada*, Destino.  
(1973) *Nada*, Destino.  
(1975) *La mujer nueva*, Destino.
- Medio, Dolores (1959) *La pez sigue flotando*, Barcelona, Destino.  
(1967) *Bibiana*, Destino.  
(1972) *Un funcionario público*, Destino.  
(1977) *Otra circunstancia*, Destino.  
(1977) *Nosotros, los Rivero*, Destino.
- Puig, Manuel (1980) *Maldición eterna a quien lea estas páginas*. Barcelona, Seix Barral.  
(1980) *Pubis angelical*, Barcelona, Seix Barral.
- Romero, Luis (1962) *La corriente*, Barcelona, Destino.  
(1967) *Bibiana*, Destino.  
(1977) *La Noria*, Destino.
- Sender, Ramon J. (1965) *El bandido adolescente*, Barcelona, Destino.  
(1971) *La antesala*, Destino.  
(1973) *Epitalamio del prieto Trinidad*, Destino.  
(1974) *Relatos fronterizrs*, Destino.  
(1974) *Las tres hermanas*, Destino.  
(1975) *Novelas ejemplares de Cíbcola*, Destino.
- Skydsgaard, Sven:(1977) *La combinatoria sintáctica del infinitivo español*,  
Madrid, Castalia.

## 〈参考文献〉

- 秋山紀一 (1982) 「スペイン語における「知覚感覚動詞」の統語構造について」, 『宮城昇教授還暦記念論文集』, 21-40
- Bello, Andres y Cuervo, Rufino J. (1977) *Gramática de la Lengua Castellana*. Sopena.
- Bordelois, Ivonne A. (1974) *The grammar of Spanish causative complements*. MIT.
- (1978) “Animacy or subjecthood : clitic movement and Romance Causatives”, *Contemporary studies in Romance linguistics*, 18-40, Georgetown University.
- Contreras, Heles (1979) “Clause reduction, the saturation constraint, and clitic promotion in Spanish”, *Linguistic Analysis*, volume 5, number 2, 161-182.
- 出口厚実 (1982) 「ヴォイス：スペイン語」 『講座日本語学10』, 305-318, 明治書院.
- Demonte, Violeta (1977) *La subordinación sustantiva*, Catedra.
- D’Introno, Francisco (1979) *Sintaxis transformacional del español*, Catedra
- 福嶋教隆 (1986) 「イスパニア語の使役文, 知覚文と文法関係」 『神戸外国語大学外国学研究』 61-80
- Kishi Daisuke (1982) *El uso del pronombre le en el español de México*. Universidad Autónoma de Guadalajara.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上. 下)』 大修館。
- 他. (1983) 『日本語の基本構造』 三省堂。
- 宮本正美 (1975) 「使役動詞・感覚動詞構文に於けるスペイン語弱形代名詞の位置について—その1—」, 『Hispanica』 19, 98-112.
- (1977) 「スペイン語使役構文に於ける “Clitic Climbing” の条件」, 『関西外国語研究論集』, 507-523
- Mourelle de Lema, M. (1981) “Los verbos causativos en español”, *Thesaurus* 36, 14-22, Instituto Caro y Cuervo.
- Ramsey, M. M. (1956) *A textbook of modern Spanish*, Holt, Rinehart and Winston.
- Roldan, Mercedes (1975) “The great Spanish le-lo controversy”, *Linguistics* 147, 15-30, Mouton.
- Ruiz-Morales, Hildebrando (1979) *Infinitives and patterns of sentential complements in Spanish*. Indiana University.
- Saltarelli, Mario (1976) “Theoretical implications in the development of accusativus cum infinitivo constructions”, *Current Studies in Romance Linguistic*, 88-99, Georgetown University.
- Sauer, Keith Edward (1972) *Sentential complementation in Spanish*. Washington

University.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』, 大修館。

—— (1982) 「ヴォイス：日本語・英語」, 『講座日本語学10』 256-279,  
明治書院。

Skydsgaard, Sven. (1977) *La combinatoria sintáctica del infinitivo español*. Castalia.

高橋節子 (1985) 「感情動詞と言語の四つのレベル」, 『Hispanica』 29, 95-110.

渡辺節子 (1982a) 「対格・与格形式における揺れ— Luis Romero と Dolores Medio の  
場合—」 『宮城昇教授還暦記念論文集』 445-458

—— (1982b) 「Leísmo における斜格形式の揺れ— Carmen Laforet の場合を中  
心に—」 『Hispanica』 26, 204-222

Yamashita Yoshitake (1985) Sobre la construcción redundante (I): Relación con los casos  
acusativo / dativo". *Linguística Hispánica*, 103-122.

Zubizarreta, M. L. (1985) The relation between morphonology and morphosyntax : the  
case of Romance causatives", *Linguistic Inquiry*, 16-2.